新たな飛躍に向けて

龍谷大学・京都産業学センター代表
重本　直利

龍谷大学・京都産業学センターは、2002 年 4 月、経営学研究科の付置機関として発足し、12 年目となっています。「京都産業から学ぶ」、「京都という経営資源と経営主体・経営能力の関連を捉える」というコンセプトを中心に共同研究に取り組み、その成果を社会に発信し、また経営学研究科の「京都産業学プログラム」をはじめとした学内の教育・研究に生かしてきました。2012 年度には、京都産業学センターの開設 10 周年記念事業としてシンポジウムを開催しました。なお、シンポジウムの内容は『京都産業学研究』特別号（2013 年 3 月）として発行されています。京都産業学センターは、現在、次の 10 年を展望し取り組みを進めているところです。

さて、センター開設以来、毎年発行し続けている年報『京都産業学研究』（今回で 12 号）、37 回を数える京都産業学研究会、そして 21 回を数える京都工芸サロンの開催などを通じて、成果を蓄積してきました。また、センター内に設置されている京都産業人倶楽部は多分野の方々にご参加いただいています。この数年では、京都市産業観光局から受託した「新・京都産業政策プロジェクトに係る中小企業調査」の実施とその成果である『中小企業調査報告書』（2010 年 3 月）の発行、10 周年を期にこれまでの成果をまとめた『京都産業学を創る』（晃洋書房、2011 年 2 月）を刊行しました。さらに「京都産業学研究シリーズ」としてその「企業別研究」の第一巻に「島津製作所」の刊行（2013 年 8 月）を行いました。このシリーズのブックレット版の刊行は 2002 年にセンターが開設して以来の課題でありました。刊行まで 10 余年を要しましたが、ここ数年、共同研究プロジェクトのメンバーとともに企業関係者をはじめ多くの方々の多大なご協力を得て、共同研究の成果として刊行することが出来ました。また、「テーマ別研究」の第 1 巻として『京都企業の人事労務管理の論理と実際』を 2014 年 3 月に刊行いたしました。今後、京都産業学研究シリーズとして「個別企業研究」と「テーマ別研究」のそれぞれの巻を重ねていきたいと思います。

また、開設の翌年から毎年開講されている京都企業の経営者による「経営学特別講義」は、本センター事業の基盤となる事例研究として毎年講義録の発行を行ってきました。引き続き内容の充実に努めていきたいと思います。さらに、京都工芸サロンは、京都産業学センター事業の柱の一つです。京都は伝統産業と近代産業・先端産業が併存する都市です。近代産業・先端産業は伝統産業とも密接な関係を有しています。京都産業学センターでは、京都の伝統産業関係者から学ぶことを重視し、開設以来、継続的にサロンを開催してきました。この記録は10周年を期に冊子としてまとめられました(2013年3月発行)。

他方、京都産業学の取り組みは、北海道産業学、オホーツク学、横浜産業学などの地域産業学・地域研究の営みにも影響を与えつつ、これら全国の地域産業関連の研究成果にも学びながら進めてきました。次の10年に向けた新たな飛躍として、京都地域および全国へのさらなる発進・連携を企図したいと考えています。

京都産業学センターはこうした今後の新たな飛躍に向けて、共同研究の担い手の継承と世代交代に取り組むとともに、経営学研究科のみならず全学的および地域的な連携のもとに事業を遂行できる組織づくりをめざしたいと考えています。2013年11月から機関の名称を、龍谷大学・京都産業学センターと変更し、また経済学部と政策学部の先生方に専門委員としてご参加いただいております。引き続き、全学センター化の実質を創りつつ、京都の産業界、自治体等との積極的な連携に努めていきたいと考えています。関係者の方々の積極的なご参加・ご協力をお願いする次第であります。